

斎藤 勇著

カンタベリ物語

中世人の滑稽・卑俗・悔悛



中公新書

749



中公新書 749

斎藤 勇著

カンタベリ物語

世人の滑稽・卑俗・悔悛

中央公論社刊

斎藤 勇 (さいとう・いさむ)

1929年(昭和4年)、京都市に生まれる。1950年、同志社大学文学部英文科卒業。1971～72年、ケンブリッジ、ユニバーシティ・コレッジにて中世英文学を研究。現在、同志社大学教授。文学博士。専攻、中世英文学。

著書 『「農夫ビラス」の研究』(英文)

『中世のイギリス文学——聖書との接点を求めて』

カンタベリ物語

中公新書 749

© 1984年

検印廃止

昭和59年12月10日印刷

昭和59年12月20日発行

著 者 斎 藤 勇

発行者 嶋 中 鵬 二

本文印刷 三晃印刷

表紙印刷 トープロ

製 本 小泉製本

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋 2-8-7

振替東京 2-34

定価 460円

ISBN4-12-100749-2

目次

第一章 『カンタベリ物語』とはどんな作品か

3

『カンタベリ物語』の作者チヨーサー 4

巡礼——『カンタベリ物語』の趣向 10

遊びとしての巡礼 17

信心業としての巡礼 21

第二章 『カンタベリ物語』「序の歌」をめぐる巡礼たち

27

イングランドの春 28

聖なる季節・四月 32

さまざまの人たち 34

教区司祭 37

女子修道院長 39

修道僧 44

托鉢修道士 47

教会裁判所召喚吏と免償説教家 50

第三章

『カンタベリ物語』における笑い

『カンタベリ物語』の笑いを生み出すもの 78

ファブリオとは何か 80

『カンタベリ物語』にみるファブリオの影響 82

作者チヨースーの語り口の工夫 86

登場人物の性格づけ 91

バーレスクの好きだったチヨースー 98

『雅歌』を下地にした「粉屋の話」 101

新約聖書を下地にしたバーレスク 106

擬英雄詩のバーレスク 114

騎士、見習騎士、郷土 57

法曹協会の賄方、法律家、医者 60

組合の職人衆、商人、船乗り 61

粉屋と莊園領管理人 64

バースからやって来たかみさん 70

中世社会の縮図 72

ロマンスのバーレスク 117

つなぎのエピソードの工夫 124

陣羽織亭の亭主の位置 130

第四章 『カンタベリ物語』における真面目と冗談

143

「騎士の話」から「司祭の話」へ 144

巡礼の掉尾・「司祭の話」 153

真面目な話の役割 158

真面目な話への聴衆の反応 164

遊びと真面目の平衡感覚 168

チャーサーのヒューモア 175

あとがき 183

カ
ン
タ
ベ
リ
物
語

第一章 『カンタベリ物語』とはどんな作品か

『カンタベリ物語』の作者チョーサー

『カンタベリ物語』は、十四世紀末のイギリスの詩人ジェフリ・チョーサー（一三四〇頃—一四〇〇）によって書かれた。ある見方からすれば、「編まれた」といった方がよいかもしれない。一種の今昔物語集である。では、チョーサーとはどういう人物か。その人柄は彼の作品を読めばおのずとわかるが、どういう生い立ちと生涯の人かを簡単に紹介しておこう。

いま、詩人といったが、厳密には、今でいう文筆で身を立てる意味での詩人ではない。役人であった。もとより古い時代のことだから、伝記的な資料が十分に揃っているわけではない。比較적으로残っている断簡零墨による推定が基礎になっている。エドワード三世（在位一三二七—七七）、リチャード二世（在位一三七七—九九）、ヘンリー四世（在位一三九一—一四一三）、三代の宮廷に仕えた役人であった。

その作品群から推すと大変な教養人、文化人であった。みずから蔵書六十冊と述懐している。その時代のことだからすべて写本であつたろうが、当時としてはたいした蔵書家である。一日の仕事がすむと、休息もとらないで家に帰って、読書に夢中になり、そのために目がかすんでしまった、と初期の作品『名声の館』のなかで記している。

一三四〇年頃に、ロンドンの富裕なぶどう酒商人の子として生れている。この頃のぶどう酒商

といえ、金銀の細工商、皮革商、貿易商、帯屋などと並んで勢力を増大してきた商人のなかでも裕福な存在であった。こういう商人のなかからロンドン市長を出したことがあるほどである。そういうご威勢のせいもあったのか、宮廷との関係ができ、エドワード三世の宮廷に出仕することになる。エドワード三世の第三王子のアルスター伯ライオネルの奥方の近習として、十七、八歳の頃には宮廷務めをしている。いくさにも出たことがあり、対フランスの戦争では捕虜になって、王から身代金を払ってもらい帰国しているから、寵もあったのであろう。ライオネルの没後、エドワード三世の四男ランカスター公ゴントのジョンに仕え、ここでは、ずいぶんその詩才を愛してもらった形跡もある。のちにランカスター公の第三夫人の姉と結婚したりして、宮廷での地位も確かなものとなる。

三十歳頃から十年ほどの間、何度も外交関係の用務で海外に出ている。イタリアへ二度も行っているが、ジェノバやフィレンツェを訪れていることから、ダンテ、ペトラルカ、ボッカチオなどの文学にも接する機会は十分あったわけだ。この間にロンドン港の税関検査官としての務めもあったし、リチャード二世の時代になってからも、四十歳台ではケント州を代表する国会議員も務めている。王の命令でテムズ河の堤の修復工事やスミスフィールドに野仕合いの棧敷を設営する仕事をうけもったりもする。五十歳台の終り頃にはサマセット州にある王室林の副林務官になったが、これがチェーサーの最後の公職で、その後一三九九年にウエストミンスター寺院の庭の

一隅の家を五十三年間契約で借りているが、その翌年十月二十五日に亡くなっている。

この約六十年間ほどの生涯のうちで、チャールサーは中世フランスの愛の寓意詩『ばら物語』の一部を訳出したり、ボエティウスの『哲学の慰め』を英訳したりしているし、ランカスター公妃の死を悼む『公爵夫人の書』、夢で大鷲にさらわれて名声の女神のいる館へ行くという『名声の館』、聖ヴァレンティンの日に自然神の宮廷に集まった種々の鳥たちの嫁選びを歌った『鳥の議會』などを書いている。しかし、なんといっても『カンタベリ物語』と並んで大きい作品は、時には近代の恋愛心理小説にも匹敵すると激賞される『トロイルスとクリセイダ』である。トロイ戦争にまつわるトロイルスの悲恋を扱ったもの。もともとボッカチオの『恋イリュミナストワットの虜』を下敷きにしたものだが、地上の恋のうまみとはかなさ、また、はかなからざるものへの想いを、一種の慰めをこめて提示し、ボッカチオにはなかった、細やかな女性の心理と人間生活のアイロニーを、時にはヒューモラスな味をそえ、人間の現実の生活感を強くうち出し、構成美十分に語りつくした大作である。そして最後に『カンタベリ物語』の構想をし、それを未完のまま残して亡くなる。一いつたいどういう読者を予想して、この人は作品を書いたのであるうか。今、読者といったが、古い時代の読者は本質的には聴衆で、読書は、誰かが古き良き時代の物語を誦そとんじており、それを朗唱するか、または書きとめたものを読みあげるのを聞く、という形式をとっていた。チャールサーの時代になると、そろそろ文字の読める人も普通の市民階級に輩出し、必ずしも耳で物語の



自作を朗読するチョーサー 確証はないが、当時の読書の基本姿勢を物語っている。15世紀初期。(ケンブリッジ、コーパス・クリスティ学寮, MS. 61)

類を楽しむだけでなく、目で文字を追って読む黙読もおこなわれるようになってきた。けれどもこの時代は、読書に口誦されたものを傾聴する習慣がふまえられていて、作者の側もそれを意識してものを書いていった。つまり、聴衆が目前にいることを想定して執筆した。したがって作品への反応も、後日の批評はもちろんあるとしても、即時の反応も予想しなければならない。チョー

サーの場合は、自分の作品を人前で朗読もしくは朗唱したのである。だから自分で書写生などやとっていた。おそらく最初に分の作品を、ひとつ聞いてください、

と試してみるのには、彼の日常生活の身近にいる人々に対してであつたらう。どんな人々が彼の作品朗読を傾聴したのだろうか。

もちろん想像の域を出ないが、諸般の事情から推して再現してみると、まず宮廷人である。若きリチャード王とその王妃、少壮の騎士たちとその従者、さまざまな年齢層の王妃の侍女たち、無骨な中年の武士、一群の行政官、ロンドンの市民層から入ってきている法律家や裕福な商人たち、司教等々、こういう人たちが壁面に飾られた広間に集まっている。暖炉は燃え、ろうそくは輝き、ワイン、香ばしいケーキ、音楽、ダンス、とびかう冗談、遊戯。そこへ同じく宮廷人で行政にも関与しているが、詩人としてすでに国の内外でかなり知られている小男でふくよかなジェフリ・チョーサーが登場する。芝居気たっぶりの身振りや表情をまじえて自作を朗読する。盛大な拍手。あとで筆写してお返ししますから、作品の写しがあればひ拝借と申し出る聴衆、といった風景が想像される。

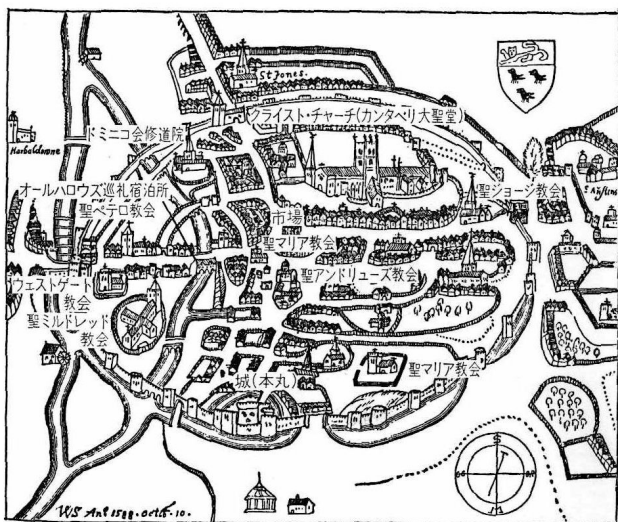
チョーサーはロンドン生れのロンドン子。要するに都会人である。都会は多面的な価値観が同居するところ。さらにチョーサーは宮廷人である。表面では宮廷は、懇懃、礼節、談笑の場であると同時に、政治の場としては権謀術策のうごめくところだ。普通の宮仕えの人が、日頃から一つの価値観や視点、あるいは陣営に自らを托していることを自他に宣言しておくことはまずい場所だ。チョーサーは政治家ではない。彼には貴顕の血によって特定の立場を固守する必然性もな



馬上のチョーサー 『カンタベリ物語』エルズミヤ写本挿画、15世紀初期。(アメリカ、サン・マリノ、ハンティントン図書館)

い。役人である。たしかに能吏ではあったが、自宅に帰ると古今の書物を読みふける男。すなわち文化人、教養人である。ただ、仕事の余暇にせつせと翻訳をしたり、古今の物語を自分なりに書きかえて工夫もこらし、皆様にご披露して、よろこんでいただけるなら、それが無上の楽しみではあるまいか。それが生き甲斐というもの。特に政權の争奪に自己の存在を賭けるという人ではなかったはずである。したがって、いつもこの人物は物事に正邪、是非の判断をくだして激昂したり目くじらをたてたりしない。ある意味で、いつも気をつかっている。もの言えば唇寒し、

と思っている。なるべく自己を前面に出したりはしない。それでも、大なり小なり自己を表白しなければならぬ作品を書くのが趣味のようだ。その辺のジレンマをどのように彼の人柄で解決していったか、これがチョーサーの作品を読むおもしろさである。そういう人柄が『カンタベリ物語』で実によく出てい

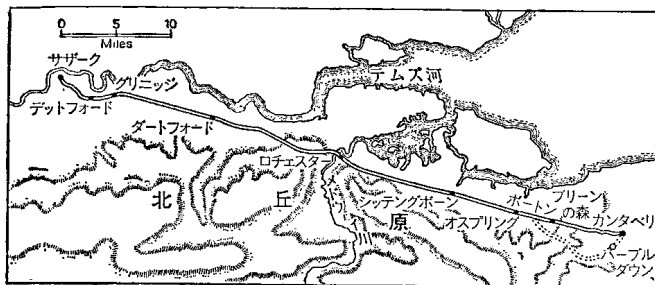


カンタベリの町 16世紀中期。(大英博物館, MS. Sloane 2596)

る。いつも距離を置いてものを見て、時には独りでおかしがったり、時にはいささかいじわるく、時には寛容に、また時にはずいぶん敬虔に、自分の扱う人物や作品の筋を組み立てていく。機に応じて自分自身をさえ、おかしみの対象として突き放すこともある。チョーサーとはこういうふうに生きてきた人なのである。

巡礼——『カンタベリ物語』の趣向

「チョーサーはしばしば「私」と名のる人物を創りだして、自分のいろんな作品に登場させた。それで、自作を朗読する「私」と作中の「私」が区別がつかないことがある。『カンタベリ物語』にもこの「私」が出てくる。どういう趣向で「私」が登場するのか。その



カンタベリ巡礼の道筋

ためには、『カンタベリ物語』自体の趣向から語っていかなければならない。

『カンタベリ物語』というのは、カンタベリに因んだ物語集ということである。では、なぜカンタベリなのか。カンタベリの町といえは当時もカンタベリ大聖堂で有名だった。昔時、トマス・ア・ベケットの廟があった。ヘンリー二世（在位一一五四―八九）と争って斬殺された大司教であったが、聖者に列せられている。ここへ巡礼者が霊験を求めたり、霊験のお礼言上のためにやってくる。イギリスでは、ウォルシンガムと並んで、ずいぶん巡礼地として有名であった。こういうカンタベリに因んで『カンタベリ物語』という題名がある。つまり、カンタベリのトマス・ア・ベケットのご廟にお詣りする人々が、旅のつれづれを慰めるために道中余興としておなじみの昔話の語りくらべをした。そして、その時の話を集めて一本にしたという趣向である。さきほどチョーサーによって編まれた、といったのもそういう意味合いからである。その辺の事情をもうすしくわしく紹介してみよう。